

女神の孤独

草間 友子（高校教師）

それは去年の秋のことだった。三年生の「現代文」の授業を終えて、国語科準備室に戻る途中の私にHさんが話しかけてきた。

—先生、志賀直哉の本を読んでみたいんですけど……

その言葉は私にとって一つの驚きであった。ひと昔、いや、遙か昔、このような会話は教師と生徒の間で交わされる、日常的なものだったはずだ。しかし今、高校生の口から志賀直哉の名前が出ることは奇跡に近い。授業中に話す、他の作家や作品に生徒は敏感に反応し、本を借りに来る生徒は確かにいる。ただ、志賀直哉に關してはほとんど無反応だ。〈小説の神様〉は孤独な存在だ。それでも毎年授業の中で、私は志賀直哉の話をする。その孤独な作家は、大学時代、私の卒業論文のテーマだった。自宅の本棚の中から一冊の本を取り出した。

『志賀直哉全集 第一巻』（岩波書店）に自然と手が伸びた。その中にある「母の死と新しい母」という短編をHさんに読んでほしいと思った。昭和四八年に発行されたその本は、字体も用字も古く、文庫本と比べて



読みにくそうだった。Hさんに渡すとき、彼女の細い腕に本はとても重そうだった。この重さだけでも嫌になるかも知れないな。私は気が重くなった。

卒業するまでに返してくれればいいから、と私は言った。けれども、Hさんは冬休み前に感想を記した手紙を持って、本を返しに来てくれた。

—「荒絹」に登場する女神の孤独を何度も考えました。

一瞬返答に戸惑ったのは、実はその作品に覚えがなかったからだ。本を貸しておいて随分無責任な話である。彼女が帰ると同時に、私は大慌てでその作品を読み始めた。私は息を呑んだ。そこには絹のようになめらかな文章があった。志賀直哉を再発見したような驚きがあった。そして、最も大きな驚きはそのような作品を見出してくる、Hさんの、現代高校生の感性の豊かさだった。

